
仮面ライダーW～BTT・EDITION～

L A N 武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW〜BTT・EDITION〜

【Nコード】

N8834X

【作者名】

LAN武

【あらすじ】

風の吹く街『風都』

この街には伝説がある。

『街に吹く風が悲しみに染まる時、何処からともなく仮面ライダーが現れ悲しみを拭い去る』

今、新たな仮面ライダーWの物語が幕を開ける。

『さあ、お前の罪を数えろ！』
『

番組宣伝（前書き）

やってしまった……。

取り敢えず、番組宣伝みたいな物です。

番組宣伝

風の吹く街『風都』……

この街には伝説がある。

街に吹く風が悲しみに色どられた時、何処からともなく仮面ライダーが現れ悲しみを払う……

この街に何年か前から言われてきた伝説だ。

そして、今日もまた風都の風が悲しみに染まる。

『行くぜ？セリカ』

『オーケーだよ。リュウくん』

二人の男女がフラッシュメモリのような物を構え、メモリに付いているボタンを押す。

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

『『変身！』』

『サイクロン！ジョーカー！』

今、新たなWの物語が幕を開ける。

『『さあ、お前の罪を数えろ！』』

番組宣伝（後書き）

ちよこちよこ書いていきます。

キャラクター設定（前書き）

主人公『左龍星』と『セリカ』のキャラクター設定です。
オマケで探偵事務所の所長ことおやっさん『鳴海宗一』の設定もあります。

メモリの説明は公式サイトからそのまま引用しました。

キャラクター設定

【左 龍星】

身長200センチ。
体重95キロ。

風都の『鳴海探偵事務所』に居を構える引き締まった身体を持つ探偵。

心優しきハーフボイルド。

ビギンズナイトの際に出会った 不思議な少女『セリカ』と共に二人で一人の仮面ライダー『W』に変身する。

決め台詞は『さあ、お前の罪を数えろ！』

【所持メモリ】

【ジョーカーメモリ】

「切札の記憶」を内包したガイアメモリで、6つのメモリのうち、最も汎用性の高いメモリとも言える。人間の肉体の運動能力を極限にまで高めることによって、技に特化した戦士を生み出すことができる。

ダブルへの変身時、最初に使用するスターティングメモリでもある。

【メタルメモリ】

「闘士の記憶」を内包したガイアメモリで、最大の腕力と防御力をもつボディを生成する。メタルボディと共にメタルシャフトも同時生成し、剛健なる戦士を生み出す。

【トリガーメモリ】

「銃撃手の記憶」を内包したガイアメモリで、射撃攻撃に特化したメモリである。トリガーボディと共に、専用銃であるトリガーマグナムを同時に生成し、強力な銃士を生み出す。

射撃技術はもちろん、爆発的な威力を持つ重火器の記憶も内包する

ため、パワーが高く、取扱いには細心の注意が必要である。

【セリカ】

身長150センチ。

体重48キロ。

B99センチ。

W58センチ。

H85センチ。

ビギンズナイトの際に『鳴海宗一』によって助けられた名前以外の記憶を失った少女。

偶に寝てる間に着てる物（下着込み）を脱ぐ事がある。

『星の本棚』と呼ばれるデータベースにアクセスする事が出来るが、自らの過去を読む事は出来ない。

龍星と共に仮面ライダーWに変身する。

精神のみメモリと融合し、変身する為残った身体はその場に倒れる。その際、傍に誰かが入れば身体を任せるが、『ああ、そうそう。ボクの身体に悪戯したら駄目だよ？ボクの身体はリュウくんの物なんだから』等と言い龍星を困惑させる事がある。

口癖は『興味深い』『実に面白い』『ゾクゾクするよ』等。

【所持メモリ】

【サイクロンメモリ】

「風の記憶」を内包したガイアメモリで、最もスピードに長けた特性を持つ。

気圧変化を促す能力も持ち、最大出力でこの力を取り込むと周囲の気圧が変動し、風を呼ぶ。

ダブルへの変身時、最初に使用するスターティングメモリでもある。

【ヒートメモリ】

「熱き記憶」を内包したガイアメモリで、高熱と闘争本能をかきたてる極めて攻撃性の高いメモリである。

強烈な熱を操る事が出来るこのメモリを使用すると、周囲の空気が熱で歪むほどのエネルギーが発現する。

【ルナメモリ】

「幻想の記憶」を内包したガイアメモリで、6本のうち、最も謎めいたメモリである。超常的な力を司る能力をもち、ダブルの肉体を自在に変化させる他、シャフトを鞭に変え、マグナムの弾道を意図的に変える力を持つ。

【鳴海宗一】

龍星の所属する【鳴海探偵事務所】の所長。

ロストドライバーとスカルメモリを使って【仮面ライダースカル】に変身して風都を守っていた。現在行方不明中。

キャラクター設定（後書き）

次回はプロログですかね。
更新は不定期です。

序章・Wの目覚め／鳴海探偵事務所の朝（前書き）

序章です。

龍星とセリカ、二人のバカップルぶりをお楽しみ下さい。

では、どうぞ。

序章・Wの目覚め／鳴海探偵事務所の朝

風の吹く街『風都』

この街にはドーパントと呼ばれる超人が存在する。

奴等は自らの力に飲まれ、人々に害を成す存在だ。

だが、この街にはドーパントに対抗する存在『仮面ライダー』がいる。

仮面ライダーは人々に仇なすドーパントが現れると風と共に現れドーパントを退治すると風と共に去っていく。

仮面ライダーは風都の伝説として語り継がれていた。

風都にある『鳴海探偵事務所』。

此処に一人の男がコーヒーを飲みながら窓から外の景色を眺めていた。

『左 龍星』……それが彼の名だ。

「セリカの奴、起きてこねえな？」

そう言つて彼はコーヒーを飲み干すと、事務所の一角にある扉を開け中へと入って行った。

長い階段を降りると其処はガレージに繋がっていた。

「おい、セリカ！いるんだろ？」

『ううん……』

ガレージの一角から艶のある女性の声がした。

龍星が声のした方に歩いて行くと其処には巨大な車と、前面が黒で後ろ半分が緑色のバイクがあった。

「セリカの奴、またリボルギャリーとハードボイルダーの整備しながら寝やがったな？」

龍星は巨大な車……リボルギャリーに向かって歩き出すとコクピットを開けた。

プシューツという音と共にコクピットが開くと、中には素っ裸の女性がかうくうと寝息を立てて眠っていた。

「ったく、『また』裸で寝やがって……。おい、起きろセリカ」

そう言つて、龍星は裸の女性の肩に手を当てて軽く揺さぶる。

「うん……。ああ。お早うリュウくん。……。おや、リュウくん困るなあ。こんな朝早くから愛し合うのかい？」

起きた彼女……。セリカは差して困った様子も無く龍星の前に隠す事無くその見事な裸体をさらけ出した。

「アホ。『また』寝てる間に脱いだんだろうが」

龍星はセリカが寝ていたリボルギャリーのコクピットを指差す。其処にはキッチンと畳まれたセリカの物らしき衣服と下着が置いてあった。

「ああ、『また』やつちやつたんだね。最近、リュウくんと一緒に寝てないからね。欲求不満かな？」

セリカはそう言いながらもそと下着を身に付け始めた。

「さて、待たせたね。朝食はもう食べたかい？」

「いや、まだだ。セリカの作る飯の方が旨いからな」

「あは、嬉しい事を言ってくれるね。じゃあ、早速準備に掛かろう」
着替え終わったセリカは龍星の腕を取り、その豊満な胸を押し付けながら階段を上っていく。

「おい、当たってるぞ？」

「うふふ、当ててるのさ」

そんなバカップルのようなやり取りをしながら扉を開き、二人は事務所へと入る。

「お待たせ、じゃあ食べようか」

「いただきます」

龍星とセリカは互いに向き合って椅子に座り、テーブルに並べられた朝食を取り始める。

因みに、本日のメニューはトーストにハムエッグ、サラダに龍星特製のコーヒーマスターである。

「所で、リュウくん？今日は何でこんなに早くからボクを起こしたんだい？何時もはもう少し遅いのに」

セリカが朝食を食べながら龍星に聞く。

「何、今日はセリカの力を借りる事が起きる気がしたのさ」

「成る程……。リュウくんの感だね？と、なるとドーパント関連の依頼が来るね」

龍星の感は高確率で当たる。特にドーパント関連だとほぼ100%に近い確率で当たるのだ。

そして、その1時間後――。

龍星の感は当たり、鳴海探偵事務所のドアが悲しみの風と共に開き、今日もまた龍星とセリカの忙しい1日が幕を開けるのであった。

序章・Wの目覚め／鳴海探偵事務所の朝（後書き）

今回は原作の第1話ですね。

この作品ではなるべくオリジナルメモリのドーパントを出そうと思っています。

バカとテストと年上の同級生と仮面ライダーW〜BTT・EDIT ION〜の相違点について。

この作品の登場人物は拙作『バカとテストと年上の同級生』の登場人物で構成されます。

主人公『榊龍星』と『左龍星』の相違点は榊龍星と違い左龍星は、

- ・大病を患っていない。
 - ・ハリセンを使わない。
 - ・超怒級シスコンではない。
- の三つです。後は殆ど同じです。

ヒロイン『瀬川芹香』と『セリカ』の相違点は、

- ・小声ではない。
 - ・身長がセリカの方が少し低い。
 - ・やたらと大胆。
 - ・欲求不満になると、寝てる間に服（下着込み）を脱ぐ。
- の4つです。後は龍星への想いも含めて全て同じですね。

では、次回もよろしくお願いします。

美波「次回はウチの出番があるわよ!」

第1話 Mの襲撃/現れるW（前書き）

第1話に御座います。

初めに言っておきます。

かなりオリジナルが混ざりました。

恐らく、仮面ライダーWの第1話とかけ離れてしまっています。

という訳で、コレをお読みの方は、コレはL A N武の妄想が爆発した仮面ライダーWではない仮面ライダーWと思って下さい。

多分これからドンドンオリジナルな展開が混ざります。

それでも良いという勇者な方はどうぞ、お進み下さい。

第1話 Mの襲撃/現れるW

風都にあるかもめビリヤード場の入り口のすぐ横にある鳴海探偵事務所の入り口の前に一人の女性が立っていた。

「此処がお父さんの探偵事務所ね」

そう言つて女性は入り口のドアを勢い良く開け放った。

「お父さん、ウチ会いに来たよーっ！」

当然、中にいるのは龍星とセリカの二人だけである。

「……誰？」

三人揃つて間の抜けた声で言つた。

「あ、あんたら誰よ！此処はウチのお父さんの事務所よ！」

「ちょ、落ち着け。ぎゃーぎゃー騒がれたら自己紹介も出来んだろ」
騒ぐ女性に龍星がそう言つと、女性は取り敢えず黙った。

「よし、取り敢えずコーヒーでも入れよう。話はそれからだ」
暫くして、コーヒーを淹れた龍星が戻り三人はコーヒーをすすりながら自己紹介をする事にした。

「先ずは俺からいこう。俺は鳴海探偵事務所の所長代理の左龍星。そして、こいつは」

「はじめまして、ボクの名前はセリカ。よろしく」

「ウチの名前は鳴海美波。此処の所長の鳴海宗一の娘よ」

「はい？」

二人の目が点になった。

「だ・か・ら！ウチは鳴海宗一の娘だつてば！」

「マジかっ！おやつさん、あの面で結婚出来たのか！？」

「こ、これは驚いた。鳴海宗一の娘がこんなに可愛いとは……」
美波の言葉に龍星とセリカは驚いた。

「色々引つかかるけど良いわ。所でお父さんは？どこにいるの？」
龍星とセリカの顔が少し曇る。

美波はそんな二人の様子には気付かず事務所内を探し回っていた。

「お父さん、どこ？」

「（どうするんだい？真実を告げるのかい？）」

「（いや、告げない。今はまだ……な）おやつさんは今、海外出張中だ。おやつさんがいない間、俺が所長代理をしているんだ」

「え、そうなの？」

龍星の言葉に美波が悲しそうな顔をする。

「どうしょ「ちょっと待った。」え、なに？」

美波が何かを言おうとした時、龍星がそれに待ったをかけた。

「お客様だ」

コンコン。

龍星が入り口のドアを見ると同時にノックが響く。

「どうぞ。お入り下さい」

がちゃっ

「あの、鳴海探偵事務所はここで……龍星君？」

「あ？もしかして……美穂か？」

依頼人は龍星の顔を見て驚く。

それに対してセリカはムツとした表情になり、龍星の背中に引く付く。無論、『当てる』いる。

「……リュウくん、彼女は誰だい？」

「ん？どうした、セリカ？彼女は佐藤美穂。俺の高校時代の友達だよ」

龍星は引く付くセリカの髪を撫でながら依頼人『佐藤美穂』の紹介をする。

「で、今日はどうした？って依頼……だよな」

ソファーに座って美穂に話し掛ける龍星。

「うん。実はこの人を捜して欲しいの」

そう言って、美穂はハンドバックから一枚の写真を取り出した。

「この人は？」

「平賀源二。3日前から連絡が取れなくなった……私の同僚で恋人

よ」

写真に写っている男は誠実そうで人当たりの良い笑顔を浮かべていた。

「彼と私はウインドスケールのデザイナーとして一緒に働いていたの。でも、少し前から人が変わったように荒れ出して、完全に連絡が取れなくなつたのは3日前。最後に届いたメールがこれよ」

そう言つて美穂は携帯を取り出し、最後に届いたというメールを龍星に見せた。

「『僕は奴らを救せない。美穂、愚かな僕を許してくれ』……か。日付は4日前。連絡が取れなくなる1日前か」

龍星は平賀源二から届いたというメールを読み上げる。

「ふむ、ウインドスケールというところ最近、爆発事故が多発している風都のブランドショップだったね。リュウくん、この依頼引き受けよう」

セリカは龍星の背中に引つ付いたまま、龍星に提案する。

「ああ、という訳だ。美穂、安心しろ。俺達に解決出来ない依頼は無い」

そう言つて、龍星は立ち上がり帽子かけにかけていた黒い帽子を被る。

「悪いな、美波。暫くの間、待つていてくれ。セリカ後は任せた。

俺はウインドスケールの事故現場に行つてくる」

そう言い残し、龍星はガレージへと降りていった。

「来たわね、探偵」

「ん？龍星殿では無いか？此処は部外者立ち入り禁止じゃぞ？」

ウインドスケールの事故現場には風都署の刑事である木下優子、秀吉の双子の姉弟がいた。

「すまん。依頼の調査で調べにやならん事があつてな」

龍星はヘルメットを取ってハードボイルダーから降りると、二人に近付きながら言った。

「じゃあ、この事故は『ドーパント』の仕業って事？」

「いや、まだ分からない。ドーパントの仕業か、只の事故か……」

龍星は現場に近づいてしゃがむと破片を調べ始める。

「私達も散々調べたけど、何も出てないわよ？」

「有無。ドーパントの仕業では無いと思うがの」

二人の声を聞きながら、龍星は黙々と調べる。

「……爆発事故だったよな？」

「ええ、そうよ」

「その割には焦げたような跡が無いな」

龍星の指摘に二人ははっとして破片を見る。

「確かに爆発なら破片に焼けた跡があっても可笑しくないわね」

「しかし、どの破片にも焼けたような跡は無いのじゃ」

爆発は炎と共に発生する事が多い。故に多少なりとも破片に焼けた跡があってもおかしくないのだが、この現場に散乱する破片にはどれも焼けた跡は無かった。

「……」

龍星は少し考えると、スタッグフォン（龍星とセリカが持っているクワガタの形をした携帯電話。スタッグメモリと呼ばれる疑似メモリを使用する事でクワガタの形になりある程度の自立行動を取る事が出来る）を取り出すとセリカに連絡する。

『どうしたんだい？』

「ああ、今ウインドスケールの現場にいるんだが、どうにも只の事故じゃ無いみたいだ。破片に焼けた跡が全く無い」

『ふむ、それだけじゃ検索も難しいな。もう少し探ってみてくれな
いか？それと、ボクは何時でもイけるからね？』

「ああ、分かった」

スタッグフォンを仕舞うと、龍星は木下姉弟の方を向こうとして、動きを止める。

龍星の視線の先には、捜索対象の平賀源二がいた。

「……平賀源二、だな？」

「平賀源二！アナタに聞きたい事があります。風都署までご同行を願います」

優子が警察手帳を出し、平賀に近付こうとすると、龍星がそれを止める。

「探偵？」

「奴が手に持っている物を見る」

平賀が手に持っている物。それはフラッシュメモリのような形をしたメモリだった。

「「ガイアメモリ！」」

「ドーパント……か」

「俺の……俺の邪魔をするなあああっ！」

平賀は叫ぶとガイアメモリのスイッチを押す。

『マギウス！』

機械音が響き、平賀は自分の肩にガイアメモリを押し付ける。

すると、溶けるようにガイアメモリが平賀の身体に入り込みその身体に変化を起こし、化け物の姿になる。

『がああああっ！』

「マギウス・ドーパントか……」

龍星が呟くと同時にマギウス・ドーパントが動き始める。

『ファイア！』

手の平から炎の固まりが龍星目掛け飛んでくる。

「うおっと！」

よけながら、スタッグフォンを取り出すとセリカに連絡を取る。

『リュウくん、大変だ！美波ちゃんが居ない！』

「何っ！こつちもドーパントが出て大変なんだぞ！」

セリカが電話に出ると同時に告げられた出来事に驚きながら、龍星も用件を伝える。

「兎に角、セリカ！『変身』するぞ！美波は後で捜そう！」

『分かった！』

電話を切り、龍星は自分の腰にダブルドライバーと呼ばれるアイテムを付け、黒いガイアメモリを構え、スイッチを押す。

同じ頃、鳴海探偵事務所でも同じようにダブルドライバーを付けたセリカが緑色のガイアメモリを構え、スイッチを押す。

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

『『変身！』』

セリカが緑色のガイアメモリをダブルドライバーの右側のスロットに差し込むとガイアメモリが消える。それと同時にまるで意識を失ったかのようにセリカが倒れ込んだ。

同じ頃、龍星のダブルドライバーの右側のスロットに緑色のガイアメモリが現れ、それを更に差し込む。そして同じように左側のスロットに黒いガイアメモリを差し込んで、両方のスロットを開く。

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

再び機械音が響き、龍星の身体を風が包み込んだ。

そして風が消えた時、其処に龍星の姿は無く、右半身が緑、左半身が黒い怪人が佇んでいた。

『貴様は……誰だ!』

マギウス・ドーパントが怪人に攻撃を仕掛けるが、怪人はそれをよけて話す。

「『俺達はW。風都の涙を拭う2色のハンカチ。二人で一人の仮面ライダーだ』」

怪人……仮面ライダーWは左手の人差し指をマギウス・ドーパントに向け、

「『さあ、お前の罪を数えろ』」

と、決めた。

近くの街路樹の陰で隠れながら見ている一人の女性に気付かないままで……。

「龍星君が半分こ怪人になっちゃった。……そんなの、ウチ聞いてない!」

次回へ続く……。

第1話 Mの襲撃/現れるW（後書き）

仮面ライダーW（BTT・EDITION）の第1話でした。
平賀源二君と佐藤美穂さんのファンの方、申し訳ありません。

オリジナルガイアメモリの解説。

『マギウス』のガイアメモリ。

仮面ライダーW第1話に出たマグマのガイアメモリの代わりに出したガイアメモリ。

『魔術師の記憶』を封じたガイアメモリで使用者は様々な魔術を使う『マギウス・ドーパント』になる。

平賀源二は手に入れたばかりでまだ使いこなしてはいないが、使いこなせば、かなり強力なガイアメモリ。

マギウス・ドーパントは、黒い覆面とマントをモチーフにした怪人。右手には杖を持っている。

バカとテストと年上の同級生と仮面ライダーW（BTT・EDITION）における『美波』の相違点。

仮面ライダーW（BTT・EDITION）における美波は、島田姓ではなく、鳴海姓になっている。役割は仮面ライダーWにおける『鳴海亜希子』。

バカ年との違いは、

- ・ドイツ育ちでは無い。
 - ・ツツコミ担当。獲物はスリッパではなくハリセン。
 - ・今後出て来る照井竜役の明久と恋仲になる。
- の三点ですね。今の所は。

因みに、鳴海宗一はバカテスの鉄人こと西村宗一教諭です。

母親の名前は鳴海洋子、高橋女史です。

妹の鳴海葉月ちゃんもいます。

出て来るかは不明ですが。

取り敢えずこんな所でしよう。

いずれはオリジナルガイアメモリの募集もしようと思っています。
その時はよろしくお願いします。

第2話Mの襲撃／新たなるドーパント？（前書き）

第2話です。基本的に短いと思います。
では、どうぞ。

第2話Mの襲撃／新たなるドーパント？

「行くぜ？」

Wはマギウス・ドーパントに向かって走り出した。

『リュウくん、奴はどうやらメモリを使いこなしてはいないようだ。今の内に止めてあげよう』

サイクロンサイドの目が点滅し、セリカが龍星に話しかけた。

「勿論だ！うおりゃあ！」

Wがパンチをマギウス・ドーパントに放つ。

『ぐがつ！』

「はっ！ていつ！そりゃあっ！」

Wは正拳・裏拳・肘撃ちの連撃をマギウス・ドーパントに叩き込む。

『このっ！』

マギウス・ドーパントが右手に持った杖から雷がほとばしる。

「くっ！」

「きゃあっ！」Wを狙った雷がそれ、美波が隠れた街路樹のすぐ近くに落ちる。

『まずい！右後方10メートルにある街路樹の後ろに美波ちゃんがいる！』

再びサイクロンサイドの目が点滅し、龍星に注意を促す。

「なっ！何でいるんだ、あの馬鹿！」

Wは跳び下がる美波のいる街路樹まで走った。

「あっ！」

「ったく、何しに来た！待っていると言っただろうが！」

Wは美波の手を引っ張ると、スタックフォンを取り出し操作する。

「あ、あんた、一体何者なのっ！あの化け物は何なのよっ！？」

美波が叫ぶ中、凄まじい爆音をあげてリボルギヤリーが到着する。

『後で教えてあげるよ』

「だから、今はこの中でじっとしている」

セリカと龍星は優しく言いながら、美波をリボルギャリーに乗せて、頭を撫でる。

「あ」

プシュー

美波は何かを言おうとしたがその前にリボルギャリーのキャノピーが閉まった。

「さて、悪いが約束が出来ちまったんでね。本気でいく」

Wは再びマギウス・ドーパントに走りよると、今度は蹴り技主体で攻撃を開始する。

『邪魔をするなあっ！』

マギウス・ドーパントは風や炎と言った魔術で攻撃するが、かする程度でWにダメージを与える事が出来ない。

「ほらよ！」

Wが回し蹴りをマギウス・ドーパントにお見舞いする。

『ぎゃばっ！』

『リュウくん！トドメと行こう』

「おう！」

Wが黒いガイアメモリ……ジョーカーメモリをダブルドライバーから引き抜くとドライバーから伸びるベルトの右腰にあるマキシマムスロットにジョーカーメモリを差し込みボタンを叩く。

『ジョーカーマキシマムドライブ！』

「『はあああああっ！』」

風と共に舞い上がり、Wは両脚を揃えそして叫ぶ。

「『ジョーカーエクストリーム！』」

W必殺の蹴りがマギウス・ドーパントに吸い込まれる。

『ぐつがああああああっ！……！』

マギウス・ドーパントが爆発し、爆煙が晴れた後には人間に戻った

平賀源二と『M』が刻まれたガイアメモリが落ちていた。だが、ガイアメモリはパキンという軽い音と共に碎ける。

「さて、後は任せるぜ？ 木下姉妹」

「任せといて」

「僕は男じゃ！」

優子と秀吉が平賀に近付こうとしたその時である。

『っ！？二人共、平賀源二から離れるんだ！』

サイクロンサイドのセリカが焦ったように木下姉弟に叫ぶ。

「っ！なっ！」

木下姉弟が平賀源二から離れると同時に地面から巨大な手が生え平賀源二を掴むとまた地面へと消えていった。

「あ、ありやなんだ……？」

『恐らく何らかのドーパントだと思うけど……。兎に角、変身を解除しよう。美波ちゃんにもドーパントやボク達について説明しないと』

「ああ、そうだな」

そう言つて、Wはダブルドライバーからガイアメモリを引き抜き、龍星の姿に戻り停めてあつたハードボイルダーに跨がるとヘルメットを被り走り去つて行つた。

「説明してくれるんでしょ？」

事務所に戻るなり美波は龍星に詰め寄つた。

「あの化け物は何！？ 同じような姿になつたあなたは一体何者なのっ！」

「落ち着きたまえ。今から説明するから」

セリカがコーヒを啜りながら美波に落ち着くように言つた。

「むう」

美波は不承不承と言つた感じで椅子に座ると用意されていたコーヒを飲む。

「先ずは……そうだな。あの怪物『ドーパント』について教えてお

こう」

セリカがどこから共無く眼鏡と黒板を取り出すと、黒板に『ドーパント』と書く。

「ドーパントとは、ガイアメモリと呼ばれる物の力で変身した人間の事だよ。因みにコレがガイアメモリ」

そう言つて、セリカはサイクロンメモリを取り出すと美波に見せる。
「ガイアメモリは地球の記憶を内包したメモリでね、ボク達のようにドライバーを持たない限りは生体コネクターを作り直に肉体に取り込むんだ」

セリカはダブルドライバーを取り出すと美波に見せる。

「そして、君も見たあのような化け物の姿になる。次にボク達が変身した仮面ライダーWについてだけ……」

「ちよつと待つて！ボク達つてウチが見た時はコイツがあの中分こ怪人になったのよ？アナタは居なかつたじゃない！」

「それは簡単。あの姿はボク達がこのダブルドライバーを使って変身した姿だからさ」

詰め寄る美波にセリカはしれつと答える。

セリカが美波に説明をしている時、龍星は椅子に座り考え事をしていた。

考える事はあの時現れた巨大な手。

（あれは、どう見てもドーパント……だろうな。だが、あんな巨大なドーパントがいるのか？）

龍星は考え事をしながら、何気なくテレビの電源を入れる。

「っ！？おい、セリカ！」

「何だい？……っ！これは……」

「え、ちよつと、どういう事？」

テレビで流れていたのは、平賀源二が死体で発見されたというニュースだった。

次回へ続く。

第2話Mの襲撃／新たなるドーパント？（後書き）

平賀君、デッドエンドです。

平賀ファンの皆様申し訳ありません。

巨大な手は原作のT・レックスドーパントの代わりのドーパントです。基本はオリジナルドーパントで行きます。

では、次回もよろしくお願いします。

Tの襲来／探偵は真実に辿り着く（前書き）

今回ちらっと平賀を殺した犯人が現れます。

それではどうぞ。

丁の襲来／探偵は真実に辿り着く

「くそっ！一体どうなってるんだっ！」

ニユースで流れた『平賀源二』死亡を聞いた龍星は腹立ち紛れに机をバンと叩いた。

「リュウくん落ち着いて」

「落ち着いてられるか！」

セリカが龍星を宥めようとするが、龍星はそれを拒否する。

「取り敢えず、優子と秀吉に会ってくる！」

「むっ！あの二人に会うならボクも行く！」

龍星が帽子を被り、外に出ようとする、むっとしたセリカが一緒に行くと言い出した。

「あの、ウチはどうしたら……」

美波がポツリと呟く。

「っっ！好きにしろ！美波、原付は乗れるか？」

「え、うん。免許はあるけど」

「なら、コレに乗ってついて来い」

そう言つて、龍星はポケットから風都のマスコットキャラクター『風都くん』のキーホルダーが付いた鍵を取り出し美波に投げる。

「わっ」

美波はそれを受け取ると、嬉しそうに龍星の後を追う。

龍星とセリカの乗るハードボイルダーと美波の乗る原付が風都警察署の前に停まる。

「探偵！丁度良かったわ。連絡取ろうとしてたのよ」

「グッドタイミングという奴じゃ」

優子と秀吉がタイミング良く玄関から出て来て言った。

「あのニユース本当なのか？」

「……ええ、本当よ。被害者は平賀源二、22歳。風都のブランドショップ『ウインドスケール』に勤めていたデザイナーよ。まあ、一週間前に退職して何処かでガイアメモリを入手。ドーパントになつて暴れていた所を仮面ライダーの手により倒されたが巨大な手に連れ去られ遺体となつて発見」

「今に至る……と」

優子の説明に龍星が頷く。

「優子ちゃん、平賀源二の遺体を発見した人は誰なんだい？」

セリカが龍星に引つ付いたまま、優子に尋ねる。

「第一発見者は佐藤美穂。平賀源二と同じ職場でデザイナーとして働いていたわ」

「美穂が……？」

優子の言葉に龍星が何かが引つかかったような顔をする。

「あれ？佐藤美穂つて事務所に依頼に来た人じゃ……？」

美波が呟く。

「なぬ！？本当かの、セリカ殿？」

「ああ、本当だよ」

秀吉の言葉にセリカが頷く。

「……探偵？」

「ありがとう、優子。もう少し、探してみる」

そう言つて、龍星はハードボイルダーに跨がった。

所変わつて、とあるスタジオ内。

龍星とセリカ、そして美波はスタジオ内にてある男を待っていた。

「……待たせたな」

「すまん。仕事中に」

龍星はやってきた男に頭を下げる。

男の名はムツリーニ。本名は土屋康太と言うが、仕事上の名前であるムツリーニの方が有名だ。

「……………一段落付いたから構わない。それで、欲しい情報は？」

「平賀源二がどうやってガイアメモリを入手したか」

龍星は懐から一万円を取り出すとムツッリー二に渡した。

「……………平賀源二はある廃工場でガイアメモリの売人と会っているのを目撃されている」

ムツッリー二が龍星に語り出す。

「その際、平賀は一人で売人と会っていたのか？」

「……………いや、話によると平賀源二は一人では無く奥にもう一人いたそうだ」

「もう一人……………。そいつが男か女か分からないか？」

「……………残念だが、暗かったらしく顔は見えなかったそうだ」

ムツッリー二が顔を左右に振りながら言った。

「そうか……………。仕事中悪かったな」

「……………気にするな」

龍星はムツッリー二に挨拶すると立ち上がり、出口に向かって歩き出した。

一端事務所に戻った龍星は今度は一人で、平賀が売人に会っていたという廃工場に来ていた。

「何か手掛かりがあるかと思って来てみたが……………」

そう言つて龍星は廃工場の中へと歩いていく。

調べながら歩いていると、何かを蹴飛ばしたような感触があった。

「あ？これは羽飾りのブローチ？」

龍星が蹴飛ばした物は年代物の羽飾りのブローチだった。

「これは確か……………」

龍星はそのブローチに見覚えがあった。それは、高校時代に友人が大切にしていた物で……………。

「まさか、平賀といたもう一人はあいつなのか……………？」

龍星が辿り着いた真実に驚愕している時だった。

『タイタン！』

「！」

ガイアメモリの起動音が響き渡り、龍星の足下から巨大な手がはえてくる。

「くそっ！セリカっ！」

龍星は間一髪それを交わすと、ダブルドライバーを腰に装着してジョーカーメモリを構える。

一方その頃――

事務所にいたセリカの腰にダブルドライバーが現れ龍星の声がセリカの頭に響く。

「オーケーだよ、リュウくん」

セリカはサイクロンメモリを構えると、思い出したように美波に向かって、

「美波ちゃん、ボクの身体を頼んだよ？そうそう、悪戯したら駄目だよ？ボクの身体はリュウくんの物なんだから」

そう言っただけでウインクをしながらサイクロンメモリの起動スイッチを押した。

『サイクロン！』

「セリカ、何言ってるんだ！」

龍星はそう言っただけでジョーカーメモリの起動スイッチを押す。

『ジョーカー！』

「「変身！」」

龍星のダブルドライバーの右側のスロットにサイクロンメモリが現れて同時に事務所内のセリカが倒れ美波が慌てつつ、

「ウチこんなの聞いてないっ！」
と叫ぶ。

龍星はサイクロンメモリを更に差し込むと左側のスロットにジョーカーメモリを差し込み、右手で左側のスロットを左手で右側のスロットを開き、手を広げる。

『サイクロン！ジョーカー！』

すると、龍星の身体を風が包み込み龍星は仮面ライダーWサイクロンジョーカー（以下WCJと記す）に変身していた。

「さあ、行くぜ？」

そう言つてWCJは駆け出そうとするが、地面から生えてくる巨大な腕に邪魔されて上手く動けないでいた。

「くそっ！」

『リュウくん、メモリチェンジだ！此処はルナトリガーで行こう！』
「っしやつ！」

セリカの声に従つて、龍星はダブルドライバーからサイクロン、ジョーカーメモリを引き抜くと右側のスロットに金色の、左側のスロ

ットに青色のメモリを差し込んだ。

『ルナ！トリガー！』

起動音と共に、Wの色が右側が金色に左側が青色に変わる。

仮面ライダーWルナトリガー（以降はWLTと記す）だ。

WLTはトリガーマグナムを取り出すとマグナムの引き金を引く。ドンツドンツドンという音と共に金色の弾丸が放たれ巨大な腕を穿っていく。

『リュウくん、前方の壁の後ろにドーパントだ！』

ルナサイドのセリカがいつの間にか飛ばしていたバット・ショットから受け取ったデータからドーパントの位置を割り出した。

【バット・ショット・カメラ型のツール。『擬似メモリ・バット』を差し込む事で、簡易AIを備えたコウモリ型偵察機に変形する。メモリをルナに変える事で超音波による索敵も可能】

「分かった！」

そう言つて、再びトリガーマグナムの引き金を引くWLT。

だが今度は腕に当たらずに弾道を変化させながら壁の裏側へと飛んでいった。

『ぐあっ！』

弾丸は見事に隠れていたドーパントに命中した。同時に巨大な腕も崩れ、元の瓦礫へと還っていった。

「さて、お前が平賀源二を殺した犯人だな？」

WLTはトリガーマグナムを構えながら、ドーパントに近づいていく。

『……』

ドーパントは近づいてくるWLTを一言も発さずにただ見つめていた。

『リュウくん、気を付けるんだ。何かがあるか分からないからね』
セリカが龍星に注意を促す。

『……ん』

ドーパントが何やら呟いた。

「……今、救ってやる」

龍星はトリガーメモリをダブルドライバーから引き抜くとトリガーマグナムに差し込み、セツトする。

『トリガー！マキシマムドライブ！』

WLTはトリガーマグナムをドーパントに向け構えるが、次の瞬間ドーパントは大地へと溶け込んでいった。

『逃げたみたいだね』

「……ああ」

そう言つて、WLTはダブルドライバーからメモリを引き抜き龍星へと戻る。

「……、本当にお前なのか？」龍星の呟きは風都の風に紛れ、誰かに届く事は無かった。

次回に続く。

Tの襲来／探偵は真実に辿り着く（後書き）

次回Tとの決着です。

メモリの名前がちらっと出てますね。

能力自体はL A N 武の創作ですので実際は違うと思います。
オリジナルメモリ紹介は次回で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8834x/>

仮面ライダーW～BTT・EDITION～

2011年11月9日11時12分発行